PROJECT

生活必需品から文化と近代化を考える

文・写真
鏡味治也

共同研究 ● 生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究（2014-2016）

生活必需品は文化そのもの

人間の暮らしは生活必需品で支えられている。ひと家族の家庭に備えられる生活必需品は、その地域でふつうに暮らしていくための装備であり、その地域の文化そのものとも言えるものである。もちろん生活必需品そのものが「文化」であるわけではない。正確には、それら生活必需品を使った生活のしかたが、その地域の人びとの文化の基盤を構成するものである。

そうした生活文化を探る絶好の手がかりであるにもかかわらず、家庭に常備された生活必需品は 20 世紀の文化人類学で体系的な調査研究がなされてこなかった。それらは生活の諸側面を描写する際に記述され、あるいは生活の変化をわかりやすく表す例として単発的に注目されることはあっても、ひと家族の生活全体を支える必需品として議論されることはなかった。それは 19 世紀には盛んだったモノ（物質文化）への関心が、20 世紀に入ると社会組織や象徴・認識体系、民族間関係などに移っていったことの反映でもある。

しかし特定地域の一般家庭の生活必需品を確認することは、その地域の家族生活の有り様を把握する、いちばん手っ取り早い道である。日本民俗学は発足以来民具の体系的研究を続けてきているし、戦後の高度経済成長期以降は日本生活学会が日本家庭の生活用品を広範に記録してきている。また考古学などは出土する生活具とその出土状況が、当時の人びとの生活状況を浮かび上がらせる唯一の手がかりとなっている。文化人類学も、今一度身近な生活用品に本格的に目を向けるべきと考え、本共同研究を企画した。

インドネシアでの先行調査

生活用品の実地調査は、じつはインドネシアおよびその周辺国の一部で、すでに 2011 年度から実施している。これは私が代表となった文部科学省の科学研究費補助金事業（基盤研究（B））「消費様式から見た国民文化形成の文化人類学的研究：インドネシア等の生活用品調査から」（平成 23 ～ 27 年度）として、他の 8 名の研究分担者・研究協力者と共同で行っている。8 人はいずれもインドネシア諸民族や文学の専門家で、農村部や都市部、中心や辺境、異なる民族や宗教帰属の家庭を手分けして訪問し、生活用品に関する資料を収集してきた。これまでの 4 年間で、合わせて 60 軒ほどの家庭を調査し、それぞれに備えられている 100 項目（品目）ほどの基本的な生活用品について、その名称や入手先や使用開始時期といったデータが、それぞれの写真とともに集まってきている。

この科研調査では、まず調べようとする生活必需品のリストアップから始めた。調査者はいずれもインドネシアでの長期滞在経験者であり、都市部でも農村部でも一般家庭の生活を肌身で感じてきたため、何が生活必需品として家庭に備わっているかの見当をつけるのは比較的容易く、地域や民族の違いを越えて共通点を指摘し合うこともごくスムーズに行えた。「衣食住」という 3 領域区分は、日本独自の概念かもしれないとの懸念もあったが、ひとまずそれをベースにおいて、インドネシアで重要な「宗教」をつけ加えた。「衣」には外出着、民族正装、普段着、寝間着、下着などを、「食」には調理具と食器を、「住」には家具調度品を、「宗教」には礼拝や儀礼の用具などといった基本項目をリストアップした。

具体的な項目の選定と合わせて、いやむしろそれ以上に注意を払ったのは、その用途や機能、それらがどういうときのために備えられ、どういうときに使われるのか、という点だった。たとえば衣類で言うと、インドネシアの、とくに町に住んで会社に勤めるような男性は、出勤するときはワイシャツを着てズボンをはき、何かセレモニーがあれば背広を着用し、家に帰れば半ズボンと T シャツで過ごし、寝るときもしばしばそのままで寝る、というのがふつうであることを、調査経験から知っていた。これを成人男性の衣類の用途分類という点から言えば、外出着（勤め人の場合の仕事着）、正装（セレモニー用）、ふだん着、それに下着ということになる。さらにインドネシアでは冠婚葬祭で民族衣装をまとうことが多いので、民族正装がそれに加わる。これらが「衣」領域の下位分類を構成し、その具体的な項目が「ワイシャツ」「ズボン」…ということになる。

「食」領域では調理用と食

ジャカルタのジャワ人家族宅、水浴び場兼トイレ。器具は近代的に改修されているが両者兼用のスペースになっている（2011 年 12 月、ジャカルタ）。

ジャカルタのジャワ人家族宅、台所。プロパンのガスコンロと流し台が L 字型に配され、流し台の裏側は洗濯場になっている（2011 年 12 月、ジャカルタ）。

事用、それに保管用が下位分類となるが、水をどうやって得るか（井戸か水道か）、また何を料理の熱源に使うか（薪かプロパンか電気か）によって、必要な項目が大きく変わることに注意が払われた。インフラの整備による生活用品の品揃えと料理や食事の様態の変化が顕著に現れる領域である。

「住」領域では間取りが下位分類に相当する。インドネシアの近代的な住居は、居間、台所、寝室、水浴び場兼トイレが最低限の基本的間取りである。狭い家では部屋の前のベランダに椅子を置いて接客するが、結婚の申込などの儀式張った客には居間を片付けて応対する。大きな家では広い居間の一部にテーブルとソファを置き、衝立てなどで仕切って客間とする。食事は台所でするか、居間の一部に食卓を置いてそこを食堂とする。こうした近代的な間取りはインドネシア国内のどの民族にも共通するいっぽう、それらは各民族の伝統家屋の間取りや部屋の使い道とは大きく異なっており、生活様態の変化をうかがわせる。

ジャカルタのジャワ人家族宅。居間の一角に食卓を置いて食事スペースにしている（2011 年 12 月、ジャカルタ）。

こうして作成した 100 項目ほどからなる生活必需品リストを使って、科研調査ではインドネシア国内各地で、また一部シンガポールやタイにも足を運んでデータを収集してきた。基本的な品揃えは地域や民族が違ってもかなり共通性が見られること、熱源や間取りが変わっても料理のしかたや部屋の使い方はすぐには大きく変わらず、用具や住居の変化に柔軟に対処していることなどが確認された。データの細かい比較はまだこれからの作業になるが、何より具体的な生活用品の聞き取りから、その家族の生活の様子や変化が浮かび上がってくる面白さは、科研調査参加者一同が実感している。

民博での共同研究

平成 26 年 10 月から始めた民博共同研究では、まずこれまでのインドネシアでの調査概要を報告紹介した後、それを世界各地で展開するための用品リストや調査項目に関する検討を始めた。科研調査ではインドネシアの人びとの近年の生活様態をおおよそ把握した上でのリスト作りだったが、世界各地で使えるような生活用品リストを作るためには、まずその生活様態について見当をつけることが必要になる。当然それは、共同研究会メンバーが熟知したそれぞれの調査フィールドでの住民の生活様態を念頭に置いた意見交換になる。そこで問題になるのは、具体的な項目（品目）を挙げる前に、上で述べた衣食住それぞれの下位分類が、はたしてどこまで世界的に適用できるかということである。衣食住の 3 領域区分の普遍性は、ここでもひとまず棚に上げておくことにして、たとえば外出着とふだん着を区別することは世界どこでも見られるのか（たとえばイタリアではその区別はあまりしないという）、調理具はどの程度まで家庭に必要とされているのか、間取りについてはどうか等々、衣食住の下位分類の妥当性を検討することから始めねばならない。

そこで生活必需品リストの前に、衣食住の下位分類を探るための仮の質問リストを作ってみた。「仕事に出る時に着る服は？」「買い物に出かけるときに着る服は？」「ふだん家で着る服は？」「一日何回家で調理する？」「一日何回家で食事する？」「フォーマルな客を家のどこで迎える？」「インフォーマルな客を家のどこで迎える？」など、40 ほどの質問からなるリストである。これで浮かび上がらせようとするのは、日常使うものというよりは、日常生活の行動パターンであり、それを組み立てている生活様態そのものである。それは言い換えればその人びとの生活文化そのものであり、生活用品調査のそもそもの主旨に立ち戻ったことになる。

順序から言えば、こうした行動パターンをあぶり出す質問を重ねて、その地域の生活様態の概要をつかみ、それをもとに必要とされる生活必需品のリストを作り上げ、生活状況の異なるいくつかの家庭でデータを集めて比較検討し、差異と共通点を確認して当該地域の一般的な生活のあり方と変異を検証する、というのが論理的な手順となろう。文化間比較はそれからの作業になる。

共同研究 2 年目にあたる平成 27 年度は、仮に作ってみた日常生活の行動パターンをあぶり出す質問リストや、インドネシア科研で使っている生活必需品のリストを、研究会メンバーがそれぞれの調査フィールドで試行的に使ってみて、不備な点を修正し、より汎用的な質問リストや生活必需品リストを整備していくことにあてる。あわせて、試行的なデータ収集ではあるが、ごくふつうの家庭にその地域ではごくふつうに備えられているモノについて聞くことから、どんなことが見えてくるかについても意見交換を重ね、文化間比較による差異の意味するものや、共通するものに根ざした生活近代化の普遍性とローカルな変異についての議論につなげていきたい。

かがみ はるや

金沢大学人間社会研究域人間科学系教授。専門は文化人類学、とくにインドネシアの国民文化と民族文化や日本の地域社会について調査研究を行ってきた。著書に『キーコンセプト 文化』（2010 年 世界思想社）、『バリ島の小さな村で』（2004 年 洋泉社）、『政策文化の人類学』（2000 年 世界思想社）、編著書に『民族大国インドネシア』（2012 年 木犀社）など。